

英語発音指導の実践と課題

著者	小菅 和也
著者（英）	Kosuge Kazuya
雑誌名	武蔵野教育學論集
号	8
ページ	93-102
発行年	2020-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00001296/

英語発音指導の実践と課題

How to teach English Pronunciation to Intermediate-level Learners in Japan

小 菅 和 也^{*}
KOSUGE Kazuya

1. 本稿の目的

英語を学ぶ日本語母語話者（本稿では、高校生、大学生等、ある程度習得が進んだ学習者を対象として考える。以下、単に「学習者」と呼ぶ）が、英語発音を学ぶ上で、特に必要性が高いと思われる項目について、具体的な指導実践を紹介し、英語発音指導の要点を明確化する一助としたい。なお、本稿では、音声学的厳密さよりも、指導の視点から単純化・簡略化を念頭に論ずる。

2. 指導すべき項目と指導の優先順位

英語発音について、学習者が学ぶべき基本的な項目を以下のように捉える。

- (1) 個々の音素（母音・子音・半母音）
- (2) 超分節音素
 - ・リズム（強弱）：弱形・曖昧母音を含む
 - ・単語間の音連結
 - ・イントネーション

一般に、英語の発音指導というと、まず個々の音素の問題が考えられる。中学校 1 年生の初期に学習する、this, that の th の発音や、日本人が苦手と言われる、/l/ と /r/ の区別などが思い浮かべられることが多い。それらもちろん重要であるが、ある程度英語の学習が進んだ学習者には、超分節音素について、まず意識させたい。これまでの学習でほとんど指導を受けていないと思われるからである。特に、上記の「リズム」と「単語間の音連結」を重視したい。

英語のリズムとは、「音声の流れの中で音の強弱や長短が規則的に繰り返される現象」（竹林・

^{*} 武蔵野大学教育学部

斎藤 2008:174) である。英語のリズムは、「強勢拍のリズム」(stress-timed rhythm) であるのに対して、日本語は「音節拍のリズム」(syllable-timed rhythm) である。学習者は、英語の発話も、日本語のリズムに乗せてしまう傾向がある。その結果、強弱のリズムに乏しい、平坦な発音になりがちである。これでは「英語らしい」発音とは言えないことを、しっかり学習者に意識させる必要がある。特に、英語のリズムに重要な要素となる弱形には注意を喚起したい。

単語間の音連結の典型的な例は、語末の子音と次の語の語頭の母音の連結である。たとえば、This is an egg. の場合、「ジス・イズ・アン・エッグ」ではなく、「ゼスイザネッグ」のように、ひとつの流れとして切れ目なく発音されるということである。また、単語間の音連結は、リズムの指導と不可分である。

指導項目に順位付けをするのはなかなか困難であるが、英語音声習得に非常に重要であるにもかかわらず、学習者の側に認識の乏しい、リズムと単語間の音連結を指導の最優先とする。これに続いて、個々の音素のうち、特に注意を喚起すべきものを取り上げる。

イントネーションについては、ごく基本的な原則に関する指導が必要であるが、かなり複雑な体系であり、実際の発話での変動も大きいので、基本的なもの以外は後回しでよいと考える。本稿では、紙幅の関係もあり、イントネーションの議論は省略する。

3. 指導の実際

スキルの向上を目的とする英語授業の中で、毎時間の帯活動として発音練習を取り入れる場合を想定して、以下論じていく。リズム（強弱の繰り返し・流れ）と単語間の音連結は不可分である。しかしながら、同時に指導するのは焦点が明確ではないので、学習者の取り組みやすさを考慮して、とりあえず一方を焦点化するのが望ましい。あえて順序付けをするとすれば、(1) リズムを主体として指導し、その中で、弱形の指導とあわせ、必要に応じて単語間の音連結を指導する(2) 単語間の音連結に改めて焦点を当てる、というのが現実的であろう。

最初に、事前の指導なしに以下のような英文を音読させ、学習者の読み方の傾向を把握する。リズムや単語間の音連結に無頓着な学習者が多い。

The ocean is full of 'songs'. Whales sing some of them. Whales are the largest animal. Some are as big as a train car.

(LET'S READ 2 "The Song of the Whales" *New Crown English Series 2*)

3.1 リズム

まず、学習者には以下のような説明を与える。

・英語のリズムとは強弱の繰り返しである。

・「強いところは、強く、ゆっくり、はっきりと。弱いところは、弱く、速く、あいまいに」

これはあくまで原則であり、また、これだけを念仏のように唱えても上達するわけではないので、当然のことながら、これに基づいて練習材料を提示する。

指導を単純化し、深澤 (2015) の方式に倣い、強弱は 2 段階 (●・の 2 種類で表記) とする。

原則として、内容語は強く、機能語は弱く発音する。一般に、学習者は、日本語の特性から弱く発音することが苦手なので、「強く」ではなく「普通に」という指導をする、という考え方もある（手島 2004）。「普通に」と「弱く」を対比することによって、「弱く」に注目させるねらいである。

機能語には、冠詞・人称代名詞・助動詞・be 動詞・前置詞・接続詞などが含まれる。これらは、「弱く」発音されるが、これは、あくまで原則であることもまず学習者に伝えておきたい。文脈や発話の意図によっては、原則通りにならないことも多々ある。これから学習することは、英語のリズムの、言わば「初期設定」であることを伝えておく必要がある。

練習材料としては、深澤（2015）を参考に、以下のような例文集を用意する。紙幅の関係もあり、一部のみ掲載する。それぞれの項目の最初の例文には、強弱（●・）を示し、それ以降の例文については、適宜学習者に強弱を考えさせた上で練習する。練習後半（例文 19 以降）では、強勢の等時性（英語の発話において、強勢が時間的にほぼ等しい感覚で繰り返される傾向）を意識させるための例文を入れた。

例文には、便宜上通し番号を振ってある。また、（ ）内は、実際の指導の際に必要な補足説明である。

弱く発音される語

（1）人称代名詞

1. I know you like it. (like it の連結についても指導する)
 ・ ● ・ ● ・
2. We found his house. (his が弱形になり、/h/ が脱落し、found と音が連結する)
3. Call him back. (him の弱形、Call との音連結)
4. I met her yesterday. (her の弱形、met との音連結)

（2）be 動詞・助動詞

5. They are tired.
 ・ ・ ●
6. The boys have gone. (have の弱形、boys との音連結)
7. We must go.

（3）前置詞

8. I'd like a cup of tea. (like a, cup of tea の音連結も指導)
 ・ ● ・ ● ・ ●
9. He is from Canada. (最初の 3 語はすべて弱形)
10. Give it to Tom. (Give it to の音連結も指導)

（4）接続詞

11. He's tall and thin.
 ・ ● ・ ●
12. This is better than that. (than は接続詞)

13. I know that it's true. (接続詞 that も弱形)
(5) 練習 (これまでの練習を踏まえた総合練習)
 14. I've heard of it. (heard 以外すべて弱形)
 15. I can see it. (see 以外すべて弱形)
 16. Give it to him. (10 と異なり、to him の場合は to が強形となる)
 17. He did his best to save the child. (等時性の練習のきっかけ)
 18. Every girl was crying sadly.

リズム (強弱の流れ)

(1)

19. Come to tea. (ペンで机をたたくなどして、リズムを取りながら練習)
 20. Come to tea with John.
 21. Come to tea with John and Bob. (John and Bob の音連結)
 22. Come to tea with John and Bob at ten. (John and Bob at ten の音連結)

(3)

23. I think he wants to leave. (以下、31 まで等時性を意識させるための例文)
 24. I think that he wants us to leave. (23 と同じリズムを崩さずに発音する)

(4)

25. I'll take him home tomorrow. (25 ~ 27, 同じリズムで発音する)
 26. I'll take him to school tomorrow.
 27. I'll take him to the concert tomorrow.

(5)

28. A B C D (イントネーションに注意)
 29. A and B and C and D
 30. A and a B and a C and a D
 31. A and then a B and then a C and then a D (28 ~ 31, 同じリズムで発音する)

(6)

- (これまでの練習を踏まえた総合練習)
 32. I can't forget the things she said.
 33. Put it on the desk.
 34. I'm sure that he wants to buy it.
 35. I wanted to meet her again.
 36. He told me that there was an accident. (弱形が多数 (5つ) 連続する例)

3.2 単語間の音連結

学習者は、英文中の単語をひとつずつ正確に発音すれば、それがそのまま文の発音になると思
 い込んでいる傾向がある。しかし、2. でも述べたように、語末の子音と次の語頭の母音は連続し

て発音され、ひとつにつながるのが自然である。英語のリズムを意識させた上で、単語間の音連結についても習得する必要がある。これによってリズムがとりやすくなる。これについても深澤(2015)を参考に以下のような例文集を練習材料とする。紙幅の関係で一部のみ掲載する。

(1) から (3) は、子音 + 母音の連結で、もっとも一般的なものである。子音を、閉鎖音・摩擦音・その他に便宜上分けてあるが、連結の感覚は同一であると言える。なお、/n/ については、3.3.2 で音素の問題としても論ずる。(4) つづり字に r を含む母音が、次の母音と /r/ を介して連結する例である。学習者は「ゼアリズ」(there is)「ゼアラー」(there are)は、発音の質はともかく、教わってくるようだ。(5) は「子音 + /j/」の連結である。(6) は、/t/+/j/ が /tʃ/ に、/d/+/j/ が /dʒ/ に音が変化する例である。この音変化は必須ではないが、聞き取りのためにも慣れることが必要である。(7) の「母音と母音」は、わたり音として /j/ /w/ を介して滑らかにつながる例である。(8) は見落とされがちであるが、語末の閉鎖音が、次に子音が続くと破裂せずに脱落する例である。たとえば、38 は、「プレイド・テニス」のように発音されがちであるが、実際には、-ed の /d/ は、破裂せず脱落する。したがって実際には、play tennis と played tennis の発音の差は微妙であり、文字で見るほど明らかではない。

単語間の音連結

(1) 子音 (p, t, k など) と母音

1. She dropped the cup and broke it. (cup and broke it の音連結)
2. Will you read it again? (read it again の音連結)
3. She felt a tap on her shoulder. (her の弱形による on との連結)
4. We can work it out. (work it out の音連結)
5. Cut it up into pieces. (強弱と音連結の統合、難易度高)

(2) 子音 (s, z など) と母音

6. The boss is out.
7. The brush is in the box.
8. Enough is enough.
9. I must give up smoking.
10. It's as cold as ice. (It's as, cold as ice の連結。難易度やや高)

(3) 子音 (l, m, n など) と母音

11. I'll come in a minute.
12. The food has run out. (has が弱形になり、food と連結)
13. I won an airline ticket. (/n/ と母音の連結が連続すると難易度が上がる)
14. Can I open an account? (同上)
15. It's warm in here.
16. No cutting in on our conversation. (強弱と /n/ の連結、難易度高)
17. Can you fill in the form, please? (/n/ と半母音 /j/ の連結)

18. Tell us all about yourself.

(4) r と母音

19. He went far away.
20. Here it is. (文末の is は強形)
21. There are four of us.
22. Where is it? (is は強形)
23. Cheer up and smile.

(5) 子音と y の音

24. Help yourself.
25. Take your time.
26. Can you stand on your head? (/n+/j/ は難易度高)

(6) 音の変化 (t/d+y) (音の変化は必須ではないが、聞き取りのためにも)

27. Do it yourself.
28. I've lost your letter.
29. Did you see it?
30. Could you open it?

(7) 母音と母音

31. Go and see it yourself. (go and は /w/ を、see it は /j/ をそれぞれ介して滑らかに)
32. May I ask you a question? (May I, I ask はいずれも /j/ を介して滑らかに)

(8) 子音と子音

33. He doesn't know it.
34. I finished the job just now.
35. I wanted to break the glass.
36. I saw an old man.
37. The round trip took two hours. (語末の閉鎖音の脱落が3カ所)
38. We played tennis after school.

これらの練習の後、「3. 指導の実際」に示した英文を改めて音読し、練習の成果を確認する。さらに中学校レベルの英文を利用して、これまでの学習の確認のため、2, 3 行程度ではあるが、まとまった文章の音読をする。ゼミなどの少人数のクラスであれば、学習者に対して個別に音読テストを行い、フィードバックをする。以下に使用した英文の例を掲げる。

The ocean is full of 'songs'. Whales sing some of them. Whales are the largest animal. Some are as big as a train car.

(LET'S READ 2 "The Song of the Whales" New Crown English Series 2)

Today we will talk about barriers in society. ‘Barriers’ are things that give some people trouble in their daily lives. These barriers are everywhere — in our houses, in our schools, and on our streets.

(Lesson 8 “Without Barriers” New Crown English Series 3)

Jimmy lived in the country, and he loved playing in a very shallow river near his house; but then his father got a job in a big city, and he moved there with his family.

(L. A. Hill. 1980. *Elementary Anecdotes in American English*. Oxford University Press)

3.3 個々の音素

母音と子音に分け、特に注意を喚起したいものに絞って取り上げる。

3.3.1 母音

現実的な問題として、母音については日本語音で代用してもあまり問題が生じないものもあるが、特に注意を喚起したい音素を以下にとりあげる。

(1) /æ/

日本語の「ア」で代用するのは不可である。最小対立でも、hat-hut, bat-but, fan-fun, mad-mud など /ʌ/ とはきちんと区別しなければならない。近似的に「エァ」のようなカタカナ表記を補助に用いて指導している。単語レベルにとどまらず、文単位での練習も必要である。竹林・他 (2013: 74) は以下のような練習用英文を提示している。

The man wearing a black hat is Sam's dad.

Nancy sang the national anthem of Canada.

(2) /ɪ/

日本語の「イ」で代用する学習者が非常に多い。/i:/ との違いは長さのみであると思っている。英語には、長さのみの違いによって弁別される音素はない。たとえば、日本語の「おばさん」と「おばあさん（おばーさん）」のように長さの違いのみで意味の違いを生じる例はない。一般に「イ」と「エ」の中間といった説明がなされるが、学習者も、beat-bit-bet, seat-sit-set のような練習では、意識すれば区別して発音できても、文や文章の音読になると、なかなか定着しにくい。やや乱暴であるが、「イ」というよりいっそ「エ」と言ったほうがよい、という指導をすることもある。

特に、無声子音にはさまれた「イ」の音は、日本語では無声化することが多く、英語の発音とはかけ離れてしまう。たとえば、city, ticket は、それぞれ「セティ」「テケット」のように発音したほうが、英語の音に近い。関連で、episode, Jupiter, recipe などについても、綴り字 i の部分は曖昧母音 /ə/ であるが、「エペソウド」「ヂューペタ」「レセピ」のように「エ」で発音したほうが、やはり英語の響きに近くなる。

(3) /ɑ:/

「アー」では不可である。アメリカ音で、こもった響きの音である。/r/ を長く発音すればよい。基本的な語彙である、bird, girl, early, first, learn, turn など、出現率は高い。アメリカ音が難し

ければ、口をあまり大きく開けずに、イギリス音 (/ə:/) で発音して、口を大きく開ける /ɑ:/ と区別する、と指導するののひとつの方法である。

(4) /ə/

いわゆる「曖昧母音」である。つづり字のローマ字読みでよい、と言われることもある。つまり、つづり字が a なら「ア」、e なら「エ」、o なら「オ」のようにである。しかし、これでは「曖昧」にならない。「なんとなく口を少し開けて声を出す」と言った説明をする。あとは、多くの語について練習することによって、「曖昧」の感じをつかませる。曖昧母音となる a, e, i, o, u をつづり字に含む基本的な単語を 100 以上並べて練習する。ここでは、綴り字との関連で、数例ずつ挙げる。網掛けの文字が曖昧母音になる。なお、最後の行は 1 語に 2 か所曖昧母音が含まれる例である。

この発音を身につけることは、「3.1 リズム」の項で述べた、「弱く、速く、あいまいに」の部分にも通じ、英語の発音を学ぶ上で、実は非常に重要であると考ええる。

about across balance gentleman private Japan China sofa data
children moment parent enemy problem payment segment tangent
animal possible minister family terrible charity
continue consider lion protect tomorrow together common society
album autumn chorus suppose unless succeed success support
action station fiction section mention location information question
banana ability continent examination addition president condition

3.3.2 子音

子音についても、注意を喚起したい音素を以下に論ずる。

(1) /n/ /n+/s/ /n+/ʃ/

有声歯茎鼻音 /n/ は、舌尖と歯茎で閉鎖が作られ、日本語のナ行音の子音に近い（ただし、日本語は舌尖と歯で閉鎖が作られる）。学習者は、日本語の語末の「ン」(N) で代用することが多い。たとえば in a week といった表現でも、/n/ による連結が生じず「インアウィーク」のような発音を頻繁に耳にする。ここは徹底して指導したい。経験的に述べると、Can I …? は「キャナイ」のように連結しても、Can you …? になると、指摘しなければ「キャンユー」のように、/n/ の発音にならないことが圧倒的に多い。Can he …? になると /n/ の発音はまず意識されない。

さらに、/n/ の発音を徹底すれば、since, prince のような /ns/ の連結は、/nts/ のように響く。辞書によっては /t/ を含めて表記しているものもある。また、ancient, conscious のように、/nf/ のつながりは、/n tʃ/ のように響く。

(2) 摩擦音 /f/ /v/

摩擦音 /f/ に関しては、「下唇を噛む」という誤った説明が流布しており、それを意識した学習者は、下唇を巻き込むような形で発音しようとする。しかも、持続可能な摩擦音にならず、一瞬の閉鎖のようになり、結局 /f/ の音は出ない。竹林・他 (2013: 32) は「上の前歯の先に下唇の内側を軽くあて」（下線筆者）と説明している。有声の /v/ になると、さらに難易度が高くなる。それぞれ音素単独で取り出して、摩擦音として息の続く限り継続できる音であることを意識させ

る必要がある。特に、有声である /v/ については、唇のあたりがびりびり震えることを実感させたい。ケータイのマナーモードのような音になるはずである。

（３）摩擦音 /z/

語頭の /z/（zoo, zone 等）を正しく発音している学習者はほとんどいない。まず 100% /dz/ の発音をしている。これも、上記の /v/ と同様に、音素単独で、摩擦音として継続して発音する練習が必要である。

（４）その他

摩擦音の /s/ と /ʃ/ はよく問題になる。たとえば、sea-she, sip-ship などはしっかり区別させたい。有名な伝承童謡の She sells seashells on the seashore. のような早口言葉（tongue twister）の例が多数あり、練習の材料として授業に取り入れることが可能である。

破擦音 /tr/ /dr/（try, drink など）も、カタカナの「トライ」「ドリンク」にならないように注意したい。関連で、cars-cards, size-sides の語尾の発音の違いなども盲点である。前者は摩擦音 /z/, 後者は破擦音 /dz/ になる。その他、語末の /l/, /l/ と /r/ の区別など挙げればきりがないので、本稿では省略する。

４．カタカナ表記の活用

英語発音習得の手段として、カタカナ表記による補助も有効な場合がある。もちろんカタカナだけを示して十分ということではなく、実際の音に加えてあくまで補助として利用する、というのが基本的姿勢である。もちろん、表記には大いに工夫が必要である。たとえば、/æ/ は「エア」と表記し、たとえば hat は [ヘアーツ] のように表記する。伝統的な日本語式の「ハット」よりはるかに英語らしい音を再生しやすい。また、3.3.1 に挙げたように、episode は [エペソウド] のように表記する。駅 station も曖昧母音の表記を工夫して、「ステーション」ではなく「ステイションヌ」のような表記が考えられる。語末の /n/ は「ンヌ」と表記するのもひとつの工夫である。さらに、句の場合も in a week を「インナウィーク」のように表記するのはわかりやすい。カタカナ発音表記を体系化する試みも行われている（若林（1997）、島岡（2014）など）が、表記に一貫性を持たせようとするとかえって無理が生じて、不自由である。それぞれ有効と思われるところで、教師が工夫して表記し、あくまで実際の音の補助として使うことを提案する。

５．おわりに

ある程度英語に慣れた学習者に対して、改めて発音指導をする際の困難は、想像以上に大きい。母語である日本語を転用した、自己流の発音が定着しているからである。また、英語学習において発音の比重は軽くなりがちなのが現状である。しかし、語彙や文法などと同等に、あるいはそれ以上に、音声はことばの第一義的な要素として重要である。「通じればよい」という議論をよく耳にするが「通じればよい」のはあくまで結果であり、目標ではない。「通じればよい」を目標にすると、通じないレベルにとどまってしまうこともままある。語彙（綴り字も含む）や文法に求められる正確さと同等の意識を音声に求めることは、ごく自然であると考えられる。

【参考文献】

- 島岡良衣（2013）『日本語で覚えるネイティブの英語発音』ダイヤモンド社
- 竹林滋（1996）『英語音声学』研究社
- 竹林滋・斎藤弘子（2008）『新装版 英語音声学入門』大修館書店
- 竹林滋・他（2013）『改訂新版 初級英語音声学』大修館書店
- 手島良（2004）『英語の発音ルールブック』NHK出版
- 深澤俊昭（2015）『改訂版 英語の発音パーフェクト学習事典』アルク
- 若林俊輔編（1997）『ヴィスタ英和辞典』三省堂
- Wells, J.C. (2008)*Longman Pronunciation Dictionary 3rd Edition*. Pearson Education